

近世庶民教育資料から見た源氏物語～双六・往来物を中心に～

展示資料一覧及び解説

平成 20 年 10 月 31 日(金)～平成 20 年 11 月 3 日(月・祝)

東京学芸大学附属図書館



庶民教育資料としての『源氏物語』

東京学芸大学名誉教授 小町谷照彦(監修・解説)

絵巻・画帖・色紙などによって絵画を通して享受されてきた『源氏物語』は、近世になって、絵入版本、また『十帖源氏』『おさな源氏』『源氏鬘鏡』『源氏小鏡』などのような絵入梗概書によって、一段と享受層も拡大されてきました。さらに、近世後期になると、遊戯具の双六、教養書・実用書としての往来物や百人一首などの庶民教育資料を通して、『源氏物語』の啓蒙化がより多彩多様になってまいります。

今回の展示では、幾つかの項目に分けて、『源氏物語』の享受の一端を、具体的な資料に即して紹介するように心がけました。展示は、七つのケースやついたてに分けて、I.『源氏物語』の作者紫式部<1～6>、II.源氏物語香図引歌と場面絵・趣意絵<7～15>、III.『源氏物語』の概要<16～18>、IV.『源氏物語』享受の諸相 源氏貝和歌<19>、源氏目録文字鎖<20～23>、源氏八景<24～25>、V.遊戯具 源氏かるた絵合<26>、双六類<28～30>のように配置されています。

I. 『源氏物語』の作者 紫式部

※< >内の数字は展示資料番号です。

まず、『源氏物語』の作者紫式部を描いたものを掲げました。紫式部絵は、石山寺にまつわる伝説、物語の執筆を拝命した紫式部が石山寺に参籠し、琵琶湖に映る中秋の名月を眺め、その光景から靈感を得て、須磨巻の「今宵は十五夜なりけり」から執筆したという伝承に基づく絵柄が中心を占めます(『女用文章手習鏡』<1>)。中には、紫式部の画像ばかりでなく、伝説の概略を付したもの(『女有職草文庫』<2>『百人一首女訓抄』<3>)もあります。

石山寺から琵琶湖を眺めやる紫式部の姿は、中国の瀟湘八景に倣った「近江八景」と結び付いて、その光景を取り入れて描かれたりします(『女用文章系車』<4>)。ちなみに、近江八景は、石山秋月、三井晚鐘、瀬田夕照、粟津晴嵐、唐崎夜雨、比良暮雪、堅田落雁、矢橋帰帆で、それぞれに和歌が詠まれ、近江八景歌が詠まれるようになります。

紫式部は「本朝名女」の一人に数えられていて、その呼称の由来や伝記が語られ、また、「水鳥を水の上とやよそに見ん我も浮きたる世を過ごしつつ」の名歌なども見られます(『錦葉百人一首女宝大全』<5>『桃花百人一首曲水宴』<6>)。

<1> 女用文章手習鏡(おんなようぶんしょううてならいかがみ) 松川半山画 秋田屋太右衛門版 嘉永2年(1849)

<2> 女有職草文庫(おんなゆうしょくみばえぶんこ) 岡田玉山画 敦賀屋九兵衛版 文政元年(1818)

<3> 百人一首女訓抄(ひゃくにんいつしゅじょくんしょう) 本屋又助版 安政5年(1858) 再刻

<4> 女用文章系車(おんなようぶんしょうういとぐるま) 河内屋茂兵衛版 刊年不明

<5> 錦葉百人一首女宝大全(きんようひゃくにんいつしゅじょほうたいぜん) 永楽屋東四郎版 刊年不明

<6> 桃花百人一首曲水宴(とうかひゃくにんいつしゅきょくすいのえん) 北山兼芳書 須原屋佐助版 刊年不明

II. 源氏物語香図引歌と場面絵・趣意絵

『源氏物語』関連の庶民資料の代表的なものに、源氏物語香図引歌(源氏五十四帖引歌香図)などと呼ばれるものがあります。それらは、『源氏物語』の各巻について、「引歌」といわれる代表的な場面や巻名にちなむ和歌を一首ずつ取り出して記し、それに関連する絵を添え、源氏香文様を付したものです。

源氏香文様は、香道の源氏香と呼ばれる組香に基づく文様です。源氏香は、五種の香料をそれぞれ五包ずつ、合わせて二五包を用意し、その中から任意に五包を取り出して順次焚き、その香料名をかぎ当てる遊戯です。源氏香の香料の組合せは、五二通りになります。源氏香文様と呼ばれるのは、香料の組合せを五本の棒をつなぎ合わせた形の文様で示し、桐壺と夢浮橋の両巻を除く、『源氏物語』の巻名に当てはめたものだからです。源氏香文様を描いた源氏香図が成立したのは、近世中期の享保年間(一七一六～三五)以前と推定されています。ところが、時期が下がって源氏香文様の由来が不明確になると、桐壺と夢浮橋の両巻に文様がないのを不審に思っ、あえて文様を書き加えたものが多く見られるようになります。

引歌に添えられた絵の図様は、場面絵と趣意絵と大きく二つに分けられます。場面絵は、物語の場面を具体的に描いたものです。桐壺巻について見ると、桐壺帝と誕生したばかりの光源氏が対面している図(『倭百人一首』<7>)、高麗の相人が光源氏の観相をしている図(『万宝百人一首』<8>)、光源氏の元服の折の図(香図ナシ『女大学宝箱』<9>)三つに本によって分かれています。この中で目立つのは、高麗の相人が観相する場所が、鴻臚館ではなく、桐壺殿舎で帝に謁見している絵柄になっているものが多いことです。場面絵の絵柄はそれぞれに特徴が見られますが、冊子風の表紙絵として描かれているようなものもあります(『女要博覧小倉錦』<10>)。

趣意絵は、巻名や巻の内容にちなむ図様の絵が添えられているもので、たとえば桐壺巻ならば、桐の木や枝、桐壺の御殿などが描かれています(『女重宝記』<11>『女訓玉文庫』<12>『女文章都文箱』<13>『紅葉百人一首姫鏡』<14>)。中には「源氏香図」が白抜きになっているもの(『歌仙百人色紙箱』<15>)などもあります。

<7> 倭百人一首(やまとひやくにんいっしゅ) 兒玉彌吉版 明治年間

<8> 万宝百人一首(ばんぼうひやくにんいっしゅ) 出版者不明 刊年不明

<9> 女大学宝箱(おんなだいがくたからばこ) 柏原屋清右衛門・須原屋茂兵衛版 文政12年(1829)

<10> 女要博覧小倉錦(じょようはくらんおぐらにしき) 六合館版 刊年不明

<11> 女重宝記(おんなちようほうき) 高井蘭山編輯 応為栄女画図 和泉屋金右衛門版 弘化4年(1847)

<12> 女訓玉文庫(じょくんだまぶんこ) 吉田屋文三郎版 安政5年(1858)

<13> 女文章都文箱(おんなぶんしょうみやこのふばこ) 辻本九兵衛版 刊年不明

<14> 紅葉百人一首姫鏡(こうようひやくにんいっしゅひめかがみ) 池田善次郎編輯 溪斎英泉図画 和泉屋市兵衛版 刊年不明

<15> 歌仙百人色紙箱(かせんひやくにんしきしばこ) 河内屋太助版 嘉永6年(1853)

III. 『源氏物語』の概要

『女源氏教訓宝鑑』<16>は、近世後期以後に一般化した女訓書・実用百科書的な面も見られますが、書名からうかがわれますように、『源氏物語』を中心に据えた古典教養書的な性格が濃厚で、巻頭と巻末に概要的な内容の紹介を置き、さらに各巻の源氏物語香図引歌に加えて、巻名の由来、語釈、梗概、引歌の解釈などが詳細に解説されている本格的な入門書です。

『女要珠文庫』<17>は、上段にやはり実用書的な知識を収め、下段に「湖月女文章」として、最初に「源氏香図」を示し、各巻の要所の説明文を仮名手本風の書体で記し、引歌を示し、作中人物の絵を添えたもので、これも優れた『源氏物語』の案内書と言えるでしょう。

『賢女遺訓 操百人一首華文庫』<18>は、百人一首の頭書の一面ごとに『源氏物語』の各巻を取り上

げて、巻名・源氏香図・年立を示し、引歌を記した場面絵を掲げて、その解説を施したもので、『源氏物語』の内容を理解するための手引書として、なかなか充実しています。

- <16> 女源氏教訓宝鑑(おんなげんじきょうくたからかがみ) 女源氏教訓鑑とも 大野木市兵衛・須原屋茂兵衛版 元文元年(1736)
<17> 女要珠文庫(じょようたまぶんこ) 寺田與右衛門版 享保6年(1721)跋
<18> [賢女遺訓 操百人一首華文庫](けんじょいぐん みさおひやくにんいっしゅはなぶんこ)
中川勘助版 安政2年(1855)仲秋発売 明治24年(1891)3月求版 女大学明治9年(1876)2月版權免許

IV. 『源氏物語』享受の諸相

「源氏貝和歌」(『女庭訓御所文庫』<19>)は、「源氏香文様」と巻にちなむ趣意絵を描いた貝覆(貝合)様の「源氏貝」の図を掲げ、それに即した和歌を添えたものです。

「源氏目録文字鎖」は、一連の文章の中にさまざまな知識を盛り込んだ「続き文章」の一つで、「文字鎖」と呼ばれるのは、尻取り風の七五調の長歌の形で、『源氏物語』の巻名を詠み入れているからです。『女用続文章』<20>『女用文章往かひ振』<21>『女今川和歌録』<22>『今川千代見種』<23>などに収められています。

「源氏八景」(『女用文艶詞』<24>『女用文庫』<25>)は、近江八景などに倣って、『源氏物語』の場面を八景に見立て、歌と絵を示したもので、「帚木夜雨」「須磨秋月」「少女初雁」「夕霧夕照」「明石晚鐘」「松風帰帆」「朝顔暮雪」「玉鬘晴嵐」となっています。

- <19> 女庭訓御所文庫(おんなていきんごしょぶんこ) 勝村治右衛門・敦賀屋九兵衛・須原屋茂兵衛版 慶應2年(1866)三刻
<20> 女用続文章(じょようつづきぶんしょう) 菊屋安兵衛・伏見屋半三郎版 文政4年(1821)
<21> 女用文章往かひ振(おんなようぶんしょうゆきかいぶり) 須原屋伊八版 天保4年(1833)
<22> 女今川和歌録(おんないまがわわかみどり) 松陰書 森屋治兵衛版 天保15年(1844)
<23> 女今川千代見種(おんないまがわちよみぐさ) 山本平吉版 刊年不明
<24> 女用文艶詞(おんなようぶんつやことば) 出版者不明 刊年不明
<25> [女用文庫](おんなようぶんこ) 出版者不明 刊年不明

V. 遊戯具

『源氏かるた絵合』<26>は、基本的には『源氏物語』の巻名や趣意絵を記した絵図の各枠に、参加した競技者に配られたかるたを、桐壺巻から相当する巻に順次並べてゆき、早く手札が無くなった者を勝ちとする遊戯だったと思われます。元来はそれぞれの「かるた絵合」に、抱玉勝直画のものに残されているような巻名などを記したかるた(手札)があったものと思われます。ばらばらになりやすいかるただけがそこから散逸し、相応の優れた絵師の手になる、見た目にも美しい絵図だけが多く残ったのでしょう。

「源氏かるた絵合仕様」に記されている遊戯法によれば、競技に先立って配られたかるたの中から一〇枚ばかりをあらかじめ出して置いておき、桐壺巻のかるたを持った人から競技を始めて、自分の手元のかるたにない適当な巻名を呼び出し、その巻名のかるたを持っている人がそれに応じてかるたを出し、さらに巻名が続くものがあれば何枚も出すことができ、もしなければ別な巻名を呼び出すというように進めていくとあります。

- <26> 源氏かるた絵合(げんじかるたえあわせ) 洗心斎綾岡画(本紙)・楊洲周延画(袋) 前田喜兵衛版 明治21年(1888)袋付
<27> [百人一首入 女調法記](ひやくにんいっしゅいり おんなちようほうき) 出版者不明 刊年不明

江戸時代の『源氏物語』享受と絵双六

東京学芸大学 日本語・日本文学研究講座 教授 黒石陽子

平安時代に成立した『源氏物語』は、およそ600年後の江戸時代に入ると、公家を中心とする『源氏物語』の精読、本居宣長に代表される国学の系譜に連なる人々による新たな読みの発見といった、知識人たちによる学問・研究がある一方、それ以外の新たな幅広い読者層が次第に生まれていきました。それには絵入りの梗概書の刊行などが大きく影響しており、広く江戸文化の中に浸透していきました。17世紀末から19世紀前半にかけて、江戸時代の文学、絵画、工芸をはじめとし、往来物の中にも取り上げられ、和服の意匠、和菓子や香道、遊戯具、遊里の文化と多岐にわたる『源氏物語』の影響を見出すことができます。絵双六もその中の一つです。

『源氏物語』に取材した絵双六には大きく分けると二系統があり、一つは『源氏物語』の巻名や巻名にちなんだ和歌、源氏香などが取り合わせて描かれているものです。本学所蔵のものうち『源氏かるた絵合』<26>はこちらに該当します。もう一つは合巻『修紫田舎源氏』に取材したものです。本学所蔵のものはこちらが多く、『そのゆかり源氏寿古六』<28>『其紫湖月雙六』<29>『若紫由可理雙録』<30>が該当する絵双六です。

合巻は、江戸後期の庶民にとって最も親しい絵入り読み物でした。『修紫田舎源氏』は、『源氏物語』を下敷きにして舞台を室町時代の足利將軍家に置き変えた内容です。文政十二(1829)年から天保十三(1842)年の十四年間にわたり初編から三十八編まで刊行されました。作者は柳亭種彦、画者は歌川国貞でした。これは大変な人気を博しましたが、その理由の一つは、国貞が描く挿絵のすばらしさでした。時代設定は室町時代ではありますが、描かれる風俗は全て当代のもので、しかも読者が憧れるきらびやかな世界が描かれていたのです。

国貞の描いた『修紫田舎源氏』の挿絵は、合巻という作品のスタイルから独立し、別に錦絵としても作られるようになり、これがまた大きなブームを巻き起こし、江戸時代の終わりに明治の初めにかけてまで作られ続けました。これらの錦絵を「源氏絵」と呼んでいました。絵双六は、『修紫田舎源氏』からの直接的な影響を受けたものと思われますが、この「源氏絵」からも大きな影響を受けていると思われます。

本学所蔵の絵双六『そのゆかり源氏寿古六』<28>『其紫湖月雙六』<29>『若紫由可理雙録』<30>はいずれも『修紫田舎源氏』に取材していると考えられますが、その作り方は少しずつ異なっています。『其紫湖月雙六』<29>の各コマの絵は『修紫田舎源氏』の挿絵をもとにしたと思われますが、各コマのコマ名のところには『源氏物語』の巻名が示されています。『若紫由可理雙録』<30>は絵もコマ名も『修紫田舎源氏』から取っており、コマ名には『修紫田舎源氏』の登場人物名が入っています。ただし所々『源氏物語』の巻名が入っているところがあり、不徹底な印象を受けますが、制作上の都合によるものと思われます。

なお絵双六の形態として、さいころを振って出たコマの数だけ進むという遊び方の「廻り双六」と、出たコマの数が示している場所へ飛ぶという「飛び双六」がありますが、『修紫田舎源氏』に取材したものは飛び双六のものが多くなっています。

<28>そのゆかり源氏寿古六(そのゆかりげんじすごろく) 一鶯斎国周画 近久版 文久3年(1863)

<29>其紫湖月雙六(そのゆかりこげつすごろく) 一雄斎国輝画 和泉屋市兵衛版 刊年不明

<30>若紫由可理雙録(わかむらさきゆかりすごろく) 立亭光彦作 一宝斎国盛画 若狭屋與市版 刊年不明

※書名のよみは、原本に記載のないものは『百人一首年表』『往来物解題辞典』に依った。いずれにも掲載されていないものは『日本古典籍総合目録』に依った。

・『百人一首年表』(吉海直人編 青裳堂書店 1997)

・『往来物解題辞典』(小泉吉永編著 大空社 2001)

・『日本古典籍総合目録』(国文学研究資料館 <http://base1.nijl.ac.jp/~tkoten/about.html> [2008/10/27accessed])

●上記展示資料は、一部を除き、東京学芸大学附属図書館のE-TOPIAで全文画像を公開しています。

<https://library.u-gakugei.ac.jp/etopia/>